マーラー雑感（1）

根室市外三郡医師会
町立別海病院
山内　　修

私はマーラー交響曲第２番「復活」を聴いて、ハードロックを聴くのを止めました。この交響曲は80分前後の大作です。ハードロックよりも激しく、ベートーヴェン（以下ベト）の第９番「合唱つき」よりも衝撃的で爆発的で感動的で、聴き終わった後には天国的な安らぎを私は味わっています。

さて、マーラーの交響曲を聴くにはガイドブックがあった方が良いでしょう。講談社現代新書「マーラーの交響曲」をお勧めしています。そしてCDの方は各交響曲一枚一枚揃えていくのも手ですが、金銭的に負担になってしまいます。しかも各曲にCDがたくさんあるので、どれを選んで良いか迷ってしまいます。そこで、まずは全集を買うことをお勧めします。アマゾンで見てみてください。輸入盤で１番から９番が3,000～4,000円ほどで手に入ります。「大地の歌」は入っているものと無いものがあります。この本とCD全集をゲットすれば、あなたはもうマーラー評論家の入口に立っていますよ。

私は２・３・４・６・８・９番と「大地の歌」を好んで聴いています。クラシックでは若輩で浅学の私ですが､それら各々での私自身の聴くポイントや、お気に入りCDなどを紹介していきたいと思っています。

２番からはじめます。一部、レコード芸術誌９月号の読者投書箱に載った文と重複する箇所がありますが、お許しください。

私は交響曲第２番「復活」のまず開始３分間を聴いて、好きな演奏か否かを判断しています。ポイントは２分くらいの所での音の溜めと、それに続く大音量の放出です。あたかもイジャキュレーションを想起するような場面です。この溜めが長いものこそが私の好きな演奏です｡そのような演奏が少ない中、ケーゲル盤（1975)、テンシュテット盤（1980)、マゼール盤（1983)、ブーレーズ盤（2005）が私のお気に入りCDです。

この中でテンシュテット盤は正規のものではなく海賊版です。NHK-FMで放送された際、その凄まじく神がかり的な演奏は、日本中のクラシックファンを熱狂の渦に巻き込んだようです。テンシュテットは当時の東ドイツ出身で1971年に妻と一緒に西ドイツに亡命。この1980年盤では、1979年から音楽監督を務めた北ドイツ放送交響楽団（ハンブルク）を指揮しています。この盤が正規のものであれば、２番の名盤勢力図が大きく変わるであろう、と言う人もいます。

次にマゼールの1983年盤です。ウィーン・フィルを指揮していて、私の好きな立派な溜めと音の大放出を堪能できます。しかし、この盤はレブレヒト著「クラシックレコードの百年史」（2014）の中で迷盤とされています。女性ソリストの大歌手エヴァ・マルトンとジェシー・ノーマンがお互いを無視して一度も目を合わさず、そのため楽団員が演奏するのを嫌がった、とのことです。一方、レコード芸術編ムック本「コンプリート・ディスコグラフィ・オブ・グスタフ・マーラー」（2010）の中では、名盤として１ページを使い取り上げられています。先の迷盤の記述もあり、私の貴重盤の一つとなっています。

12月の年の瀬になると、ベト第９番「合唱つき」が多くの場所で聴かれます。私の提案ですが、マーラー第２番を毎年１月の年が明けたら皆で聴きましょうよ。「復活」という副題はマーラー自身がつけたものではないのですが、新しい年を迎えるにあたり、これほどピッタリの曲はないと思われます。特にコロナで疲弊し、ボロボロになった年を越しての新しい年には、皆の心が一つになるのではないでしょうか。第５（最終）楽章の歌詞の一部を次に示します。「よみがえるために、私は死ぬのだ！よみがえるだろう、そう、直ちにお前はよみがえるだろう！」。

この２番は1963年11月に、暗殺されたケネディ大統領の追悼のために、テレビでバーンスタインがニューヨーク･フィルを指揮し演奏したとのことです。演奏したのは第４と第５楽章だけだったようです。この二つの楽章は、他の楽章と違って歌と合唱が入っています。そうです、１月に演奏するとしたら第４と第５楽章だけでも良いのです。それだけでも40分前後かかりますが、若い人でもこのくらいの時間なら聴けるでしょう。

年越しそば：ベト９番、年明けうどん：マーラー２番という位置づけでどうでしょうか。私の元日は皆さんと同じくいろいろ忙しいので、箱根駅伝を見ながら２番「復活」を聴きたいと思っています。

次回はマーラー交響曲第３番を、またも私見ですが紹介したいと思っています。２番「復活」を知ったら最後、あなたもマーラーのトリコになるかも。